



こういう曲なので、ヒットという訳にはいかないが、大名曲である。ちょっとしたアレンジで、世界に通用する曲でもある。世俗っぽさ（不当に貶められた）からスタートした幼い彼女が、努力や苦難を経て、余人の追撃を許さない、大人の純文学的歌謡曲に到達したシーンでもある。「終わりなき旅」「裏窓」なども、同様である。いうまでもなく、見事に素晴らしく唄いこなしている。

この曲は、歌謡曲ではあるが、ジャズ調のストリングスが快く、シリアスな内容を返って切実に感じさせる。

（なかにし礼・詞 三木たかし・曲）

眠れ 眠れ わが魂よ 雨の匂いにむせながら みんな最後は一人ぼっち てんてん手鞠の手がそ
れて 別れて来ましたあの人と---てるてる坊主の真似をして 死んだりしません つらくとも---み
んな迷子の ひとり旅

（収集プロフィール）

美空 ひばり（みそら ひばり、1937年（昭和12年）5月29日～1989年（平成元年）6月24日）は、数々のヒット曲を歌い銀幕スターとして多数の映画に出演した昭和の歌謡界を代表する日本の歌手、女優である。女性として初の国民栄誉賞を受賞。

*もはや言うまでもなく、戦後最大の歴史的スーパースター、美空ひばり。彼女の存在は昭和歌謡史にとてつもなく大きな足跡を残したと同時に、激動の時代を生き抜いた日本国民の数少ない心のよりどころであった。その功績はあまりにも大きい。

49年、敗戦の喧騒のさなか弱冠12歳の天才少女、美空ひばりは「河童ブギウギ」にて登場。笠置シズ子の「東京ブギウギ」を下敷きとした、このデビュー曲は残念ながらヒットに繋がらなかった。がしかし、同年公開された初主演映画『悲しき口笛』の同名テーマ曲が爆発的のヒットを記録し、一躍スターダムへのし上がる。以降、ドメスティックな色合いの演歌歌謡楽曲を着実にヒットさせていく一方で、ジャズ/マンボ/ブルース/ロックンロール/ロカビリーなど、いわゆる洋楽テイストを大胆に導入し消化した、秀逸極まりない歌謡ナンバーを数多く世に残していった。また、50年代半ばより、江利チエミ、雪村いづみと共に“三人娘”として活躍。以後、脈々と受け継がれるイメージ戦略先行型三人編成アイドル・チームの礎となっていたのは言うまでもなからう。1989年永眠。

*「不死鳥」シリーズ4枚をまとめたボックス。病床からカムバックした美空ひばりが88年4月に発表したオリジナル作「不死鳥」での、ひばり本来の素直な歌唱には感涙する。この演歌・歌謡曲の作家陣による作品に対して、「川の流れるように？ 不死鳥パート2?」は88年12月発表の秋元康プロデュース作で、ポップス系の作曲陣による曲という構成。ここからひばりの「マイ・ウェイ」といえる晩年の名曲「川の流れるように」が生まれた。88年4月の東京ドーム公演を収録した「美空ひばり in TOKYO DOME」では、往年のヒット曲集とならざるを得ないほどヒットがあったことを実感させる。ディスク4の冒頭のゆっくりとうたい始める「真赤な太陽」には、ひばりの歌力(チカラ)を思い知る。「ひばりの佐渡情話」でスーッと涙を流す姿を思い浮かべてし

まう。

*上原げんとや米山正夫らによる映画主題歌などを歌うひばりの初期音源を含むベスト。ひばり節のコブシは、演歌とは異質の、伝統的な邦楽のコブシだったと確認できる「かもめ白波」「涙の白桔梗」などが聴ける。意外なほど凝ったサウンド創りも発見するはず。

*美空ひばりが歌ったリズム歌謡を集めている。笠置シズ子の真似でデビューしているだけに、彼女のビート感は逸品だ。演歌などではなく、リズム歌謡の中でひばりは再評価されるべきだし、同時にもっと評価されていていい米山正夫の作品との相性の良さを確認。

*アルバム「祈り」 軍歌・戦時歌謡13曲+オリジナル3曲で、幼少期を戦時下に過ごした彼女の「平和」への想いをまとめた企画作。空襲など自らの悲惨な体験をベースに、死んでいった者への温かな眼差しを込めつつ、あの時代への嫌悪とある種の郷愁を見事に唄い上げている。

*モダンでメロディアス、そしてアバンギャルドに発展していった昭和30年代40年代の歌謡曲シーンが注目を集めている。そんなドーナツ盤時代のヒット・ナンバー。

*アルバム「Happy Birthday,HIBARI!!!」

日本の歌謡史に燦然と輝く巨星、美空ひばり。2006年はデビュー60周年に当たる年で、1949年のデビュー曲「河童ブギウギ」から89年のファイナル・シングルとなった「川の流れるように」まで、ベスト中のベスト全60曲を収めた記念アルバム。最初と最後の曲が「川(河)」が付くのは奇遇か?まとめて聴くと、美空ひばりという人が、ただ歌がうまいだけでなく実に表情豊かに歌っているのがわかってくる。このアルバムには日本語の歌だけでなくスペイン語の「エル・チョクロ」、英語の「上海」「アゲイン」も歌っているが、もちろん美空ひばりはスペイン語はもちろん英語もできなかつた。だが完璧と言っていい発音で歌っている。これらの歌は耳コピーした歌なのだ。美空ひばりの歌のうまさの要因のひとつは耳が良かったことだとわかる。昭和の天才を3時間45分で知る好企画盤。

*「美空ひばり端唄集」

江戸時代末期から幕末にかけて流行った三味線弾き語り曲の端唄。いわゆる当時の流行歌である端唄の名曲20作品を収録したアルバム。「江戸のいきといなせ」を歌い分けたひばりの歌声は見事だ。

*ストリングスをバックにひばりの歌う「ひとすじの道」は、その昔ジャズ・ソングを歌った姿を思い出させる堂々としたもの。アクの強いひばり節が散見されるが、ここでの歌い上げは圧巻。「ひばりの観音経」は小林旭のリズム歌謡で知られる粕林正一作曲

内容的には、どっぶり演歌であるが、楽曲には、洋楽のテイストがたっぷり取り入れられている。ひばり晩年の、傑作のひとつ。高度なテクニックを駆使して、ヒロインの深い孤独、ひとりの部屋の寂寥の情景を描きだすのに成功している。

(詞・たかたかし 曲・弦哲也)

誰もいない 誰もいない 裏窓ぬらす雨の音 酒で心をだましだまして 飲んでも---どんな時でもわがまを あなたは笑い聞いてくれたわ 忘れられない---

(収集プロフィール)

美空ひばり(みそらひばり、1937年(昭和12年)5月-1989年(平成元年)6月24日)は、数々のヒット曲を歌い、また銀幕スターとして多数の映画に出演した、昭和の歌謡史を代表する歌手であり、女優。

女性として初の国民栄誉賞を受賞した。横浜市磯子区滝頭出身。愛称は御嬢(おじょう)。横浜市立滝頭小学校卒業。精華学園高等部卒業。

*49年、敗戦の喧騒のさなか弱冠12歳の天才少女、美空ひばりは「河童ブギウギ」にて登場。笠置シズ子の「東京ブギウギ」を下敷きとした、このデビュー曲は残念ながらヒットに繋がらなかった。がしかし、同年公開された初主演映画『悲しき口笛』の同名テーマ曲が爆発的ヒットを記録し、一躍スターダムへのし上がる。以降、ドメスティックな色合いの演歌・歌謡楽曲を着実にヒットさせていく一方で、ジャズ/マンボ/ブルース/ロックンロール/ロカビリーなど、いわゆる洋楽テイストを大胆に導入し消化した、秀逸極まりない歌謡ナンバーを数多く世に残していった。また、50年代半ばより、江利チエミ、雪村いづみと共に“三人娘”として活躍。以後、脈々と受け継がれるイメージ戦略先行型三人編成アイドル・チームの礎となっていた。

89年永眠。多くの日本国民が、悲しみに暮れた。

*病床からカムバックした美空ひばりが88年4月に発表したオリジナル作「不死鳥」での、ひばり本来の素直な歌唱には感涙する。この演歌・歌謡曲の作家陣による作品に対して、「川の流れるように? 不死鳥パート2?」は88年12月発表の秋元康プロデュース作で、ポップス系の作曲陣による曲という構成。ここからひばりの「マイ・ウェイ」といえる晩年の名曲「川の流れるように」が生まれた。88年4月の東京ドーム公演を収録した「美空ひばり in TOKYO DOME」では、往年のヒット曲集とならざるを得ないほどヒットがあったことを実感させる。ディスク4の冒頭のゆっくりとうたい始める「真赤な太陽」には、ひばりの歌力(チカラ)を思い知る。「ひばりの佐渡情話」でスーッと涙を流す姿を思い浮かべてしまう。

*迫りくる儉約の時代、屋外カラオケのブームなど見越してのリリースだろうか。大きい文字で印刷された歌詞カードと、コードネーム付きメロ譜がつく実用カラオケCDでありながら、元歌手によるオリジナル歌唱もついている。こういうリリースをきっかけにした演歌・歌謡曲の復権もありえるかも、と1枚目の美空ひばりで早くも思わされた(泣いた)。第2期20タイトルは8月発売予定で、今回リリースされた顔ぶれの他、北見恭子、若山かずさ、西尾夕紀、堺正章、扇ひろ子、北原謙二などが名を連ねている。

私は熱狂的なファンではないが、この曲に至ってはもはや神がかり的うまさ、といって過言ではない。失った恋へのオマージュが、雄大な塩屋岬を舞台に、深く切なく唄われる。従来「哀愁波止場」「哀愁出船」「ひばりの佐渡情話」が三大名唱と言われてきたが、この曲を加えて、四大名唱とするべきであろう。あと、抒情歌の名唱として「津軽のふるさと」「愛燦燦」「冬のくちびる」「川の流れるように」。酒の名唱として「悲しい酒」「裏町酒場」など。

(詞：星野哲郎 曲・船村徹)

髪のみだれに手をやれば 赤い蹴だしが 風に舞う 憎や 恋しや 塩屋の岬 投げて届かぬ
想いの糸が 胸にからんで 涙を---

(収集プロフィール)

美空 ひばり (みそら ひばり、1937 (昭和12) 5月～1989 (平成元年) 6月) は、数々のヒット曲を歌い銀幕スターとして多数の映画に出演した昭和の歌謡界を代表する日本の歌手、女優である。女性として初の国民栄誉賞を受賞した。横浜市出身。愛称は御嬢 (おじょう)。精華学園高等部卒業。

*もはや言うまでもなく、戦後最大のスーパースター、美空ひばり。彼女の存在は昭和歌謡史にとつともなく大きな足跡を残したと同時に、激動の時代を生き抜いた日本国民の数少ない心のよりどころであった。その功績はあまりにも大きい。1949年、敗戦の喧騒のさなか弱冠12歳の天才少女、美空ひばりは「河童ブギウギ」にて登場。笠置シズ子の「東京ブギウギ」を下敷きとした、このデビュー曲は残念ながらヒットに繋がらなかった。が、同年公開された初主演映画『悲しき口笛』の同名テーマ曲が爆発的ヒットを記録し、一躍スターダムへ。以降、ドメスティックな色合いの演歌・歌謡楽曲を着実にヒットさせていく一方で、ジャズ／ブルース／ロカビリーなど、いわゆる洋楽テイストを大胆に導入し消化した、秀逸極まりない歌謡ナンバーを数多く世に残していった。また、50年代半ばより、江利チエミ、雪村いづみと共に“三人娘”として活躍。

*『不死鳥』シリーズ4枚をまとめたボックス。病床からカムバックした美空ひばりが88年4月に発表したオリジナル作『不死鳥』での、ひばり本来の素直な歌唱には感涙する。『川の流れるように?不死鳥パート2』は88年12月発表の秋元康プロデュース作で、ポップス系の作曲陣による曲という構成。ここからひばりの「マイ・ウェイ」といえる晩年の名曲「川の流れるように」が生まれた。ディスク4の冒頭のゆっくりとうたい始める「真赤な太陽」には、ひばりの歌力(チカラ)を思い知る。

*「美空ひばり端唄集」江戸時代末期から幕末にかけて流行った三味線弾き語り曲の端唄。いわゆる当時の流行歌である端唄の名曲20作品を収録したアルバム。“江戸のいきといなせ”を歌い分けたひばりの歌声は見事。

*「Happy Birthday,HIBARI!!!」最初と最後の曲が“川(河)”が付くのは奇遇か。まとめて聴くと、美空ひばりという人が、ただ歌がうまいだけでなく実に表情豊かに歌っているのがわかってくる。このアルバムには日本語の歌だけでなくスペイン語の「エル・チョクロ」、英語の「上海」「アゲイン」も歌っているが、もちろん美空ひばりはスペイン語はもちろん英語もできなかった。だ

が完璧と言っていい発音で歌っている。これらの歌は耳コピーした歌なのだ。美空ひばりの歌のうまさの要因のひとつは耳が良かったことだとわかる。

*「祈り」軍歌・戦時歌謡13曲+オリジナル3曲で、幼少期を戦時下に過ごした彼女の、平和への想いをまとめた企画作。空襲など自らの悲惨な体験をベースに、死んでいった者への温かな眼差しを込めつつ、あの時代への嫌悪とある種の郷愁を見事に。

*「ひばりロマンチック」美空ひばりによる東西のラブ・ソングが全19曲。前半は洋楽が並ぶが、まるで自身のオリジナル曲のように唄っている。終戦後の駐留軍時代に思春期を過ごした彼女にとっては、これらの楽曲は空気のようなものだったのかもしれない。ボーナス・トラックの「スターダスト」は、平井堅とのリミックス・デュエット。

米山正夫らによる映画主題歌などを歌うひばりの初期音源。ひばり節のコブシは、演歌とは異質の伝統的な邦楽のコブシだったと確認できる「かもめ白波」「涙の白桔梗」などが聴ける。意外なほど凝ったサウンド創りも発見するはず。

軍歌・戦時歌謡13曲+オリジナル3曲で、幼少期を戦時下に過ごした彼女の「平和」への想いをまとめた企画作。空襲など自らの悲惨な体験をベースに、死んでいった者への温かな眼差しを込めつつ、あの時代への嫌悪とある種の郷愁を見事に唄い上げている。

*日本の歌謡史に燦然と輝く巨星、美空ひばり。2006年はデビュー60周年に当たる年で、1949年のデビュー曲「河童ブギウギ」から89年のファイナル・シングルとなった「川の流れるように」まで、ベスト中のベスト全60曲を収めた記念アルバム。最初と最後の曲が「川(河)」が付くのは奇遇か。まとめて聴くと、美空ひばりという人が、ただ歌がうまいだけでなく実に表情豊かに歌っているのがわかってくる。このアルバムには日本語の歌だけでなくスペイン語の「エル・チョコクロ」、英語の「上海」「アゲイン」も歌っているが、もちろん美空ひばりはスペイン語はもちろん英語もできなかつた。だが完璧と言っていい発音で歌っている。これらの歌は耳コピーした歌なのだ。美空ひばりの歌のうまさの要因のひとつは耳が良かったことだとわかる。昭和の天才を3時間45分で知る好企画盤。

女性として初の国民栄誉賞を受賞した。横浜市磯子区滝頭出身。愛称は御嬢（おじょう）。横浜市立滝頭小学校卒業。精華学園高等部卒業。本名は加藤和枝（かとうかずえ）。

この曲とカバーの「目ン無い千鳥」は、心にすんなり入り込んで、とてもいい。密会と、切ない心のゆれを唄って、味わい深い。大川は、歌唱力があり過ぎる？ために、ときに技巧がエグイ感じがある。また、五木ひろしや森進一ほど、名曲に恵まれていないのも事実であろう。

(詞・吉岡治 曲・市川昭介)

くもりガラスを手でふいてあなた明日が---つくしても つくしても ああ 他人の妻 ふたり咲いても---

(収集プロフィール)

大川 栄策（おおかわ えいさく、1948年10月-）は、日本の演歌歌手である。

「さざん~かのお~、やあ~ど~♪」でお馴染みの"演歌界のエイチャン"こと大川栄策。その辺にいそうなオッチャン風情あふれる佇まい/歌声が実に味わい深い。

高校を卒業と同時に、昭和の大作曲家である古賀政男に弟子入り。そして昭和44年に「目ン無い千鳥」(兄弟子、アントニオ古賀のB面)で念願のデビューを果たす。以後、"古賀メロディ"を歌い続け、昭和57年「さざんかの宿」で見事に大輪の華を咲かせたのであった。最近では"筑紫竜平"のペンネームで作曲もこなし、恩師の影を追って韓国音楽にも果敢に取り組んでいる。

*オープニングから入る重厚なサクスが印象的な曲であり、比例してしっとりと歌い上げる大川節に好感だ。桜が散る季節というのは、毎年のように寂しい。ハラハラと舞う桜を、思い焦がれる人と重ね合わせ、その切ない胸の内を哀愁たっぷりに語るのだ。

古賀政男が監修したもので、専門家の間で話題になっていた歌唱力の確かさを実感できる。

*「寒椿」は叙情あふれる詞とメロディを、情感豊かに歌い上げた、大川の新たな代表作だ。作家直伝レッスン入り。

*最近の注目曲「炎の螢」や、募る想いを酒に託し男の心情を熱く歌った「海峡酒場」など全16曲を収録した大川コレクション。彼の持ち味を十分に引き出した聴き心地の良いメロディにあふれている。

*なんか、「さざんかの宿」以降ヒットには恵まれてないような気もしますが、魑魅魍魎の芸能界にありながら、一本気で純情そうな風貌と歌声にはまったくお変わりがないようで、何よりです。あっぱれ。

*イメージしていたほど演歌臭いコブシを利かせる歌唱ではない。その柔らかな歌声が高音域で微妙に震えるとき、切なさが醸し出される。歌よりも、彼の歌声そのものが魅力になっていると実感させるベスト盤。

*「能登の恋歌」は、流れるようなテンポを軸に男の抒情を感じさせる歌唱とドラマティックなサウンド構成がみごとにミックスした傑作。歌を通して、吹雪と荒波や寒風に飛ぶ波の花など冬の日本海の情景が目浮かぶ。

*「筑後川」「裏町みれん」など4曲が新録だが、大川のしみじみとした歌声と粋な節回しは少しも変わらず、人気の長さを支えている。

*古き良き演歌の本流を歩みつつ、どこか飄々とした味わいを持つのが大川流か。ベスト盤なの

に歌詞しか載っていないブックレットは、いささか不親切。

*「夢一天」は、みごとな七五調の歌詞にギターの爪弾きメロディがじっくり馴染んだ演歌の定番作で、大川の歌声がまことに気持ちよく響いている。

*「駅」「再会」と市川作品の後、たかたかしの「稲妻」に続き、今回の「風港」では氷川きよし作品を手掛ける作詞松井由利夫と、作曲伊藤雪彦のコンビによるシングル。メジャー・コードの別れ歌「風港」とマイナー・コード「夫婦みち」の夫婦演歌が好対照。

*夢を追い、夢に破れた男が連れ合いへの詫びと感謝を歌う「男歌」。最後に希望が提示されるが、非常にほろ苦い一曲。情景描写が、さすがにうまい。「明洞の夜はふけて」は韓国の作曲家、鄭豊松の作品。コード付き譜面と「稲妻」の振り付け解説付き。

*雪降る冬の酒場を舞台に、強さとやさしさがほろりと心に染み入る男歌を聴かせてくれる。

*スケール感あふれる歌声を聞かせてくれた前作「港雨」に続くシングル。里村龍一、弦哲也のコンビによる聞き応え十分な楽曲で、その歌声はますますスケールを増している。

略歴

福岡県大川市生まれ。佐賀県立佐賀商業高等学校を卒業と同時に上京し、作曲家古賀政男に弟子入り。そして1969年に「目ン無い千鳥」（兄弟子、アントニオ古賀のB面だった）で念願のデビューを果たす。以後、「古賀メロディ」を歌い続け、1982年「さざんかの宿」が大ヒット。NHK紅白歌合戦にも初出場した。最近では「筑紫竜平」のペンネームで作曲もこなし、恩師の影を追って韓国音楽にも果敢に取り組んでいる。

エピソード

特技は箆笥を担ぐ事。出身地の大川市は箆笥をはじめとする「大川家具」の産地として有名であり、その関係で身につけた特技だが、1984年を最後に公の場では封印していた。しかし2006年、「駅」キャンペーン中のJR西日本京都駅前で24年ぶりに披露した。

「スターどっきり(秘)報告」（フジテレビ）において、お色気どっきりでの騙されっ振りが今尚、伝説となっている。内容は、ゴルフコンペに呼ばれた大川を担当する若い女性キャディーが、ミニスカート、ポロシャツのボタンを全開にしたノーブラといういでたちで大川を悩殺した。

大の巨人ファンとしても知られ、2006年7月27日のラジオ日本ジャイアンツナイター(東京ドームでの巨人対広島戦)にゲスト出演した。

2005年頃より通信カラオケDAMの機種改良に伴い、同機種で配信する大川の代表曲で背景映像に大川本人が出演する映像が多く採用されている。

代表曲

「目ン無い千鳥」（霧島昇のカバー）

「さざんかの宿」（第34回NHK紅白歌合戦歌唱曲）

「盛り場おんな酒」（第35回NHK紅白歌合戦歌唱曲）

「男って辛いよな」（第36回NHK紅白歌合戦歌唱曲）

「雨の港」（第37回NHK紅白歌合戦歌唱曲）

「あなたに生きる」

「恋吹雪」

「わかれ港町」
「冬花火」
「東京逆転笠」
「江差・追分・風の街」
「舞酔い雪」
「夢もどき」
「夢ひと夜」
「雨の永東橋」
「みれん雨」
「絆川」
「小諸情歌／炎の蛍」
「酔いぐれすずめ」
「出で湯橋」
「わかれ恋歌」
「北の慕情」
「想い定めて」
「夢一天」
「炎の蛍」
「海峡酒場」
「海峡ふたりぼっち」
「男春秋」
「哀愁平野」
「新道」
「寒椿」
「港雨」
「夜明け前」
「駅」
「再会」
「稲妻」
「名残りの桜」

昭和45年ごろに、中ヒットした「長崎の夜はむらさき」。当時「ロッセ歌のアルバム」などで、派手めな感じの瀬川を、ときどき見かけた。が、4、5年すると、ほとんど見かけなくなった。この中ヒットの代表曲で、彼女は長い間、全国を営業していたのだ。いわゆる、ドサ回り。17年後、この曲が大ヒットするまで。この曲は、その声の出し方などの表現といい、心情の搾り出し方といい、こってりのド演歌で、私はあまり気が乗らないのだが、名曲であるのは間違いない。

生まれる前から 結ばれていた そんな気がする 紅の糸---なんにもいらぬ あなたがいれば
笑顔ひとつで 生きられる---

(収集プロフィール)

瀬川 瑛子 (せがわ えいこ、1948-) は歌手・女優。東京都渋谷区出身。歌手・瀬川伸の次女。

来歴・人物

1967年デビュー。歌手活動の他に、その柔和な人柄から歌番組以外のバラエティ番組にも多数出演している。山田邦子、清水ミチコ、コロケ、栗田貫一らにもものまねをされている。初めてものまねされた時、父の瀬川伸から「ものまねされて、初めて一流の歌手だと認められたこと」と教わった為、自分がものまねされる事を非常に喜んでいた。

ヨークシャテリアを4匹も連れて歩くような、マダム風情の派手な外見とは裏腹に、酸いも甘いも舐めてきた苦労人だ。

歌手である父、瀬川伸に幼い頃より英才教育を受け、67年に18歳でデビュー。3年目に「長崎の夜はむらさき」がヒットするものの、鳴かず飛ばずの時代は長く続いた。その間、流した涙は星の数ほど、歌手を辞めようと思った夜もあったかと思う。そんな彼女の地道な活動が結実したのが「命くれない」(87年)の大ヒットではなかろうか。女の男に対する痛々しいまでの情念を歌った曲だが、ここに出てくる“あなた”とは、瀬川にとって“歌”のことではないかと深読みしたくなるほど感情がほとばしっている。以降、トップ・スターとして活躍し続けている彼女は、ある意味ジャパニーズ・ドリームの体現者。

主な曲

涙の影法師 (1967年)

デビュー曲

長崎の夜はむらさき (1970年)

矢切りの渡し (1983年)

命くれない (1986年)

*1987年度オリコンシングルチャート年間1位、同年のTBSザ・ベストテン年間ベストテン第2位。売上100万枚を超えるヒット。

憂き世川 (1988年)

人生晴れたり曇ったり (1990年)

人生つづら坂 (1992年)

笑いじわ（1995年）

あなたが命（2000年）

連理の枝（2001年）

すでに、16の名曲と、10以上の佳曲を持つ、ゆるぎない大歌手である。この曲は、安心して聴ける定番の演歌ながら佳曲で、リズムカルなたたみ掛けが良い。この曲は、多くの歌手がカバーしているが、やはり五木ひろしが、群を抜いている。

約束の うれしさ胸に 口紅をさす 待ち人待つ夜の 宵化粧---

(収集プロフィール)

五木ひろし(いつきひろし、1948～)は、日本の歌手、作曲家。2007年、紫綬褒章を受章。福井県三方郡美浜町出身。

生い立ち

父親は鉾山技師で鉾脈を追って家族で各地を転々とし京都府で生まれる。生後、家族で美浜町に移り、父親は鉾山技師を辞め建築用石材を扱う会社を興す。

1964年、第15回コロムビア全国歌謡コンクール優勝。作曲家の上原げんとにスカウトされ、内弟子となる。「歌うミスター平凡」(雑誌『平凡』)に選抜。1965年6月、“松山まさる”として、コロムビアから「新宿駅から/信濃路の果て」でデビュー。シングルを計6枚発売するもヒットに至らず、1967年にポリドールへ移籍。1967年4月、“一条英一”に改名して、ポリドールから「俺を泣かせる夜の雨」で再デビュー。シングルを計3枚発売するもヒットに至らず、1968年、契約を解除される。1969年、銀座で弾き語りをしているところを作曲家の遠藤実にスカウトされ、ミノルフォンと契約。12月、“三谷謙”に再び改名して、「雨のヨコハマ/東京 長崎 札幌」で再デビューを果たすもヒットに至らず。デビューしてから約5年間の間に2度も芸名を変更するなど不遇の時代を過ごす。

*1970年、よみうりテレビ制作の『全日本歌謡選手権』に、歌手生命のすべてを賭けて“三谷謙”として出場。第1週挑戦時には、「これで駄目なら、ふるさとの福井に帰って農業をやる」と悲壮な覚悟を語っているが、最終的には10週連続で勝ち残り、グランドチャンピオンに輝く。これにより、レコード歌手として再デビューできる権利を獲得。同番組の審査員であった作詞家の山口洋子と、作曲家の平尾昌晃に師事。プロデューサーには山口が就任。キックボクシング・ジムであった野口プロモーションと契約を結び、同プロ所属の芸能人第1号となる。

1971年3月、“五木ひろし”として、ミノルフォンから再デビュー。「五木」は山口洋子が五木寛之から頂戴した。再デビューの「よこはま・たそがれ」で、山口は女ごころを表現した詞を書き、平尾昌晃がそれにモダンでソフトな演歌調の曲を付けた。マイクを左手で持ち、右手は拳を握り締め、腰をシェイクさせてリズムを採る独特の歌唱スタイルは、同じ野口プロに所属していたキックボクサー・沢村忠の“ファイティング・スタイル”からヒントを得たもので、物真似をされるほどに五木の代名詞として定着。五木は「“拳”は演歌の“コブシ(小節)”をかけている」と語っている。「よこはま・たそがれ」はオリコンで、最高位1位、65万枚に迫る売上げを記録。第2弾シングルのマドロス演歌「長崎から船に乗って」も最高位4位、45万枚に迫る売上げを記録。

主な曲(Aは名曲・他は佳曲)

1971年(昭和46年)

Aよこはま・たそがれ（作詞：山口洋子、作曲：平尾昌晃）

長崎から船に乗って（作詞：山口洋子、作曲：平尾昌晃）

1972

かもめ町みなと町（作詞：山口洋子、作曲：筒美京平）

待っている女（作詞：山口洋子、作曲：藤本卓也）

A旅鴉（作詞：藤田まさと、作曲：遠藤実）

あなたの灯（作詞：山口洋子、作曲：平尾昌晃）

1973

A霧の出船（作詞：山口洋子、作曲：平尾昌晃）

Aふるさと（作詞：山口洋子、作曲：平尾昌晃）

A夜空（作詞：山口洋子、作曲：平尾昌晃）

1974

A浜屋顔（作詞：寺山修司、作曲：古賀政男）

1975

A千曲川（作詞：山口洋子、作曲：猪俣公章）

1977

灯りが欲しい（作詞：藤田まさと、作曲：遠藤実）

1979

蝉時雨（作詞：喜多条忠、作曲：宇崎竜童）

Aおまえとふたり（作詞：たかたかし、作曲：木村好夫）

1980

A倅せさがして（作詞：たかたかし、作曲：木村好夫）

Aふたりの夜明け（作詞：吉田旺、作曲：岡千秋）

1981

人生かくれんぼ（作詞：たかたかし、作曲：弦哲也）

1982

A契り（作詞：阿久悠、作曲：五木ひろし）

A居酒屋（木の実ナナ&五木、作詞：阿久悠、作曲：大野克夫）

1983

A細雪（作詞：吉岡治、作曲：市川昭介）

1984

A長良川艶歌（作詞：石本美由起、作曲：岡千秋）

おはん（作詞：たかたかし、作曲：岡千秋）

ふたりのラブソング（都はるみ&五木、作詞：吉岡治、作曲：五木ひろし）

1985（昭和60）

そして...めぐり逢い（作詞：荒木とよひさ、作曲：中村泰士）

浪花盃（作詞：石本美由起、作曲：市川昭介）

1987

追憶 (作詞：阿久悠、作曲：三木たかし)

1991

おしどり (作詞：石坂まさを、作曲：弦哲也)

2000

A山河 (作詞：小椋佳、作曲：堀内孝雄)

2005

Aふりむけば日本海 (詞：五木寛之、曲：五木ひろし)

2006

高瀬舟 (詞：水木れいじ、曲：五木ひろし)

2008

凍て鶴 (詞：喜多条忠、曲：三木たかし)

2010

おしろい花 (たかたかし 詞 木村好夫 曲)

1985年頃、発表。最近は、ライフワークである、童謡や唱歌の分野でも、大きな成果をあげている。この曲は、その知名度は、由紀のオリジナルを500曲として、400位前後であろう。名曲であるのに、知る人がすくない。内容的には、マドロスと港の女という、ありきたりなもの。けれど、いちど聴いてほしい。セミクラシックのように、美しいメロディー。瀟洒に洗練された、多くのフレーズ。終わっていく恋への、抑制された激しい情念が、美しく眩い。

(作詞 吉田旺 作曲 川口真)

雨が来そうよ 傘をもってね 港についたら 捨ててください 口づけは許して 許して ようやく---遅れてしまうわ 船の時間に

(収集プロフィール)

由紀さおり(1948~)日本の歌手・女優。群馬県桐生市出身。

少女時代から姉の安田祥子と共に本名の「章子」名義で童謡歌手として活躍。1965年に歌手デビューを果たすも、まったくヒットせずしばらく停滞の時代に入るが、1969年再起をかけた「夜明けのスカット」が当時の深夜番組でBGMとして使用されたことを機に大ヒットし、最終的には150万枚のミリオンセラーとなり、この年、日本レコード大賞歌唱賞を受賞すると共に、NHK紅白歌合戦にも初出場を果たす(以降1978年・第29回まで10年連続で出場)。その後も「手紙」「生きがい」「故郷」「ルーム・ライト」「挽歌」「トーキョー・バビロン」などの優れた歌謡曲を世に送り出し、その確かな歌声は「酔い覚ましの清涼剤」との評価を受ける。1973年には「恋文」で日本レコード大賞最優秀歌唱賞を受賞した。

*日本を代表する童謡歌手。今や『紅白歌合戦』の常連としてもお馴染みの由紀さおり・安田祥子は、親から子へと受け継がれていく童謡や愛唱歌をより多くの人々に聴いてもらいたいと願い、国内のみならず海外においても公演活動を行う。そして、姉妹の抜群の歌唱力/ハーモニーは国境も世代も越え、幅広い層から支持を得ているのだ。その美しく透きとおった歌声の影に乾いた哀しみが漂っているのに気付くと、由紀さおりの歌の表情が一変するはずだ。巧みにさまざまな歌唱スタイルをみせるが、「手紙」「金糸雀(カナリヤ)」「夢もうすこし」などでの寂寥は癒しがたいほど深く哀しい響きだ。

*誰もが幼少期に慣れ親しんだ旋律と、温かい母性愛に満ち溢れた優しい歌声は、郷愁を誘い疲弊した心を潤します。あなたも、純粋な気持ちに立ち返ってみてはいかが。

*1980年代になると、主にテレビ司会者・女優としての活躍が目立ち、彼女のマルチな才能が一気に開花した。1983年には松田優作主演の「家族ゲーム」でお惚けな母親役を好演し、日本アカデミー賞助演女優賞を受賞、1987年には朝の連続テレビ小説「チョッちゃん」で主人公の母親役を演じ、流暢な方言を披露し話題となった。また、かつてフジテレビ系列で放映された『ドリフ大爆笑』などで、ザ・ドリフターズとコントで共演することが多く、ドリフメンバー(とくにいかりや長介)からはお笑いの「いろは」を数多く学び、ドリフの番組の中では、沢田研二同様、ゲスト歌手としては珍しくコントの「オチ」を任されることもしばしばあった。最近でもNHKの「コメディお江戸でござる」(のち「道中でござる」)でも、レギュラーで出演し、芸人顔

負けのコメディエンヌぶりを披露した。

1985年より姉・祥子と共に童謡コンサートをスタートさせ、徐々に歌手活動に再び重点を置くようになる。1986年には童謡アルバム「あの時、この歌」を発表し日本レコード大賞企画賞を受賞。童謡ブームの火つけ役となる。1987年には童謡歌手としてNHK紅白歌合戦に復帰し、以降2001年まで紅白の常連として出演した。なお、1992年にはトリを務めている。現在も各地で精力的にコンサートを行うと共に、近年では再び女優・タレントとしての側面が注目され始めている。

主な曲

夜明けのスキヤット（1969.3）＊オリコン・シングル史上、最も歌詞が短い1位曲。

天使のスキヤット（1969.7）

枯葉の街（1969.10）

手紙（1970）

生きがい（1970）

故郷（1972）

恋文（1973）

挽歌（1974）

季節風（1975）

お先にどうぞ（1987）

1987年、発売。もう10何年も前になるが、何かの集まりで行ったカラオケボックス。体育会系の、とてもハンサムな青年が、この唄を歌った。たぶん22才位である彼が、30才以上も年上の、ベテラン歌手の唄を歌うという取り合わせが、おかしく、新鮮だった。しかし、テレビなどで見聞すると、この唄は、若い世代にも結構好まれているようだ。大歌手でありながら、美空ひばりと比べると、影が薄いのはなぜだろう。思い浮かぶ唯一の理由は、私生活のコントロールが下手なのだろうか、ということ。彼女のスキャンダルは、私生活から発生したものが多。ダメンズ・ウォーカーの、はしり、でもあるような気がする。

死んでしまおうなんて 悩んだりしたわ 花も小鳥たちも 死んでおしまいと...自分だけ惨めなのと 泣いて暮らしたわ....

つぶやきのように、日々のあれこれが語られるが、よく聴くと詞のフレーズに、強いリアリティーがあるのが特徴であろう。情景を連想させる、力が強いというか。

エンディングにむかって、徐々に盛り上がっていく曲調も、詞の内容によく合っている。曲の基底を全面的に支えるリズムも、都会的で快い。

(収集プロフィール)

島倉千代子(しまくら ちよこ、1938年3月-)は、東京都品川区生まれの、演歌・歌謡曲系の歌手。日本音楽高校卒業。

*昭和30年代は今で言うアイドル的存在(テレビ放送世代の元祖アイドルともいえる。)で一時代を築いた。デビュー50年を経た今も尚、第一線で芸能活動を続けており、戦後の歌謡界に多大な貢献をした一人といえる。

略歴

1954年、コロムビア全国歌謡コンクールで優勝し、同社と専属契約。

1955年、デビュー曲「この世の花」(同名の映画の主題歌)がヒットし(売上200万枚)人気歌手になる。後にテレビドラマでカバーされ、1977年に同名の映画の2作目で再度カバーされる。

1957年、「東京だヨおっ母さん」が60万枚の大ヒット。映画化もされ、自ら主演する。その後、1976年、1979年にも歌唱)。

1960年、NHK紅白の紅組トリを務める(1960~1962年、1973~1975年の計6回に渡りトリを務める)。

1963年、元阪神タイガースの藤本勝巳と結婚するが、6年後に離婚。

1968年、「泣き節」を売り物としていた彼女にとり異色の作品である「愛のさざなみ」が幅広い世代の間でヒット、この曲で第10回日本レコード大賞・特別賞を春日八郎とともに受賞。

1977年、ある人物の借金の連帯保証人になり、その人物が突然失踪、数億もの借金返済のため、写真集の発売、キャバレー回りなどをしながら、足掛け7年程で完済した。彼女の支持はこのような「アンダーグラウンド」的な活動をしている最中でも衰えを知らず、1987年に出場辞退するまで、史上初のNHK紅白30年連続出場の大記録を樹立した。

1988年、「オレたちひょうきん族」での山田邦子の物まねやコロケによる物まねをきっかけ

に「人生いろいろ」が若者にも受け、大ブレイク（売上130万枚）。同年の第30回日本レコード大賞で最優秀歌唱賞を受賞。「100万枚記念パーティー」では、山田邦子とコロッセが本人の目の前で、物まねにより「人生いろいろ」を熱唱。これに対し島倉は、「山田邦子さんとコロッセさんのおかげで、『人生いろいろ』が若い方にも親しまれるようになり、光栄です。」と二人を賞賛する。

*その後、1993年には初期の乳がんの手術をするなど苦労も多かったが、ライブハウスなど演歌歌手の粋をはみ出して精力的に活動。

1999年、紫綬褒章を受章した。

2004年、NHK紅白歌合戦に35回目の出場を果たす。

代表曲

- 『この世の花』(1955年、デビュー曲 同名の松竹映画の主題歌。大ヒット)
- 『りんどう峠』(1955年、初の古賀メロディー。大ヒット)
- 『東京の人さようなら』(1956年、暮れの発売のためヒットは翌年になってから。大ヒット)
- 『逢いたいなアあの人に』(1957年、紅白初出場曲。大ヒット)
- 『祇園まつり音頭』(1957年、京都の祇園祭で今でも流れる)
- 『東京だよおっ母さん』(1957年、当時はセリフなし。大ヒット)
- 『からたち日記』(1958年、セリフ入りは売れないのジンクスがあったが大ヒット)
- 『思い出さん今晚は』(1958年、大ヒット)
- 『海鳴りの聞こえる町』(1959年、中ヒットしたがなぜかあまり歌わなくなった)
- 『哀愁のからまつ林』(1959年、大ヒット)
- 『他国の雨』(1960年、鳴海日出夫の「涙のグラス」の歌詞を変えて吹き込む。中ヒット)
- 『白い小ゆびの歌』(1960年、片面は美空ひばり「つばなの小径」。ジャケットも、島倉と美空の写真を2枚ずつ市松に配して、どちらかA面かわからないように配慮されてあったが、双方のファンから猛反発)
- 『恋しているんだモン』(1961年、大ヒット、島倉の口癖をアイデアに作詞)
- 『夕月』(1961年、中ヒット。島倉の主演ドラマの主題歌。)
- 『襟裳岬』(1961年、大ヒット。)
- 『七夕おどり』(1962年、仙台の七夕祭りで今でも流れる)
- 『星空に両手を』(1963年、大ヒット。守屋浩とのデュエット)
- 『あの橋の畔で』(1963年、松竹の同名映画の主題歌。映画の人気と共に大ヒット)
- 『新妻鏡』(1965年、戦前に霧島昇&二葉あき子が歌ったものをカバー)
- 『ほんきかしら』(1966年、大ヒット)
- 『涙の谷間に太陽を』(1966年、中ヒット)
- 『ほれているのに』(1967年、中ヒット。前年に続いてリズム歌謡路線で人気を博す)
- 『愛のさざなみ』(1968年、大ヒット。日本調一本の歌手ではなくなった)
- 『すみだ川』(1969年、戦前の東海林太郎の代表作をカバー)
- 『竜飛岬』(1971年、大ヒット)

『鳳仙花』(1981年、「竜飛岬」以来、ヒットに恵まれなかったが、久しぶりのヒットになった)

『くちべに挽歌』(1986年、中ヒット。この曲で紅白を一旦辞退)

『人生いろいろ』(1987年、第30回日本レコード大賞最優秀歌唱賞受賞。「愛のさざなみ」以来20年ぶりの大ヒット)

『ちよこまち』(2003年、現在の島倉のテーマソング)

島倉千代子は、かなりの曲数(2000曲近く)を吹き込んでいる。当時のアルバムにだけしか入っていない曲もあるため、何曲持ち歌があるか正確に数えるのは困難と思われる。

中ヒット程度だったが、聴き込むうちに、じわじわと重荷を増して来る曲である。人物の位置関係が、やや把握しにくいようだが。酒場の主人が女性で、客として来ているのが、男性（私という主人の、昔の男であるらしい）である。つまり、かつて別れた女を訪ねて、男が酒場に来ているのだ。お互いに心を残しながらも、訳あって別れて、それぞれの人生を暮らしている二人。男は縊りを戻したいようだが、女は理由をつけて、それとなく「無理」と言っている。人間の歴史が始まって以来、このようなシュチュエーションに立ち至った男女は、何千万組と、いたであろうか。男は、心と海に面した窓を開ける。すると、ただ茫漠とした青灰色の北の海が、果てしなく広がっている。曲のなかで、全体のメイン・フレーズである（窓をあけたら海 北の海 海 海）の部分は、3回繰り返し替えされる。つまり果てしなく広がる海以外、何も無い光景。男が見つめる、その冷青の海や、波立つ白波の先の先。そこに、どんなときでも安らぎや、ほのかな希望を与えてくれる、日本的心情の敷衍する、場所があるのだ。

（詞・阿久悠 曲・中村泰士 1980）

黒地に白く染め抜いた つばさをひろげた鷗の絵 とんで行きたい行かれない 私のころと笑うひと 鷗と-----

（収集プロフィール）

石川 さゆり（いしかわ さゆり、1958～ ）は、熊本県飽託郡飽田村（現・熊本市）出身の歌手。堀越高等学校卒業。

*昭和48年(73年)のデビュー以来、四季折々の風景のなか、旅情感に満ちた名所旧跡を舞台に繰り広げられる「オトコとオンナの恋模様」をヴィブラートの効いた抜群の艶ヴォイスで表現。ここで展開される日本的なあしのマゾヒズムに基づいた男女関係(自由奔放な男とじっと耐える女)は、すべての老若男女に猛烈なカタルシスを呼びおこしたのであった。「能登半島」「天城越え」「夫婦善哉」など、数多くの国民愛唱歌を有し、その実力は、日本レコード大賞、全日本有線大賞などにおける輝かしい実績が証明している。

*「さゆり III」色っぽいのである。むろん容姿もそうなのだが、何より声そのものに男心を蕩けさせるような魅力がある。決して妖艶ではないが、清楚さと芯の強さを兼ね備えた歌声は、細やかな情感を切々と歌い上げるのにピッタリだ。

*最期に石川さゆりのために残した「桜夜(さくらよ)」を収めたシングル。三木たかしの遺志を受け継いださだまさしが、「生命(いのち)」をテーマに詞を制作した感動作だ。

*「さゆり IV」シングル曲「惚れたが悪いか」をはじめとして、日本の女性の「情」をさまざまな角度から表現している。おなじみの吉岡治、弦哲也(「天城越え」のコンビ)作品や、小椋佳、堀内孝雄など、新たな作家陣による力作を収録。

来歴

小学2年の時、島倉千代子のコンサートに接し感動、次第に歌手を志すようになる。小学5年時に一家で横浜市神奈川区に転居、のち歌のレッスンを受け始める。

横浜市立城郷中学3年の夏休みに、フジテレビのオーディション番組に（応募したものの参加できなくなった友人に替わって）参加し合格。同年秋にはフジの別の番組にレギュラー出演したという（2009年3月放送「ぴったんこカン・カン」より）。

1973年3月25日、「かくれんぼ」でアイドル歌手として日本コロムビアよりデビュー。キャッチフレーズは“コロムビア・プリンセス”だった。しかしデビューから暫くは花の中三トリオなどの影に隠れて

、大きな人気を得るには至らなかった。

それから4年後の1977年に「津軽海峡・冬景色」が大ヒットとなり、第19回日本レコード大賞歌唱賞など、数々の音楽賞を受賞した。また同1977年発売の「能登半島」「暖流」もヒット、1980年代に入ってから「波止場しぐれ」「滝の白糸」など順調にヒット曲を世に送り出し、日本を代表する女性演歌歌手の一人となった。2008年までNHK『紅白歌合戦』に通算31回出場している。

1981年、元マネージャーの馬場憲治と結婚。1984年2月に長女を出産、1989年2月に離婚。石川は「私は平成に入って最初に離婚した芸能人」と明るく語っている。

主な曲

かくれんぼ（デビュー曲、1973年）

あなたの私（1975）

津軽海峡・冬景色（1977）

能登半島（1977）

暖流（1977）

沈丁花（1978）

火の国へ（1978）

鷗という名の酒場（1980）

東京めぐり愛（琴風豪規とのデュエット、1984）

波止場しぐれ（1985年）

天城越え（1986年）

夫婦善哉（1987年）

滝の白糸（1988年）

風の盆恋歌（1989）

うたかた（1990）

ウイスキーが、お好きでしょ（1991年）

越前竹舞い（1991）

港唄（1991）

ホテル港や（1992）

飢餓海峡（1994）

転がる石（2002）

一葉恋歌（2004）